様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２７２６

研究課題名（和文）構文ネットワークによるヴォイスの歴史的・対照言語学的記述研究

研究課題名（英文）Historical and contrastive study of grammatical voice description: by means of constructional network

研究代表者
志波　彩子（Shiba, Ayako）

名古屋大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：８０５７０４２３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：古代日本語に「ゴミが捨てられた」のような事態実現の局面を捉える無生物主語受身文が存在しなかったのは，西欧諸言語の中動態がこの種の受身文を発達させた領域に，日本語は自発・可能構文を中心に発達させたからであるとして，スペイン語の中動態と古代日本語のラル構文の体系を対照し，論証した。両言語は，「自然発生」の意味の自動詞から，動作主がいなければ起こり得ない事態をも自動詞的に捉える構文を同じように拡張させているが，スペイン語が「人によって事態が自然発生する（変化が実現する）」という意の受身を確立したのに対し，日本語は「人に対して事態が自然発生する／しない」という自発・可能を中心に確立した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は，独自の観点から古代語のラルが持つ受身（人主語），可能，自発，尊敬といった多義性にせまり，自然発生的自動詞文とのつながりと相違点を明らかにした。自然発生的自動詞文から再分析によって取り出されたラルは，人間に視点を置いて，「人間に対して行為が自然発生する（変化が実現する）」という述べ方で述べる構文であったと考えられる。このため，中立視点の非情主語受身文を持たなかった。こうしたラル構文の特性が，上のような多義の体系を作り出したと考えられる。

研究成果の概要（英文）：We demonstrated that the reason behind the absence of the agent-defocusing passive (inanimate subject passive) is that Japanese developed the non-volitional/potential construction with “rare” in the area where other languages have developed the agent-defocusing passive. Contrasting the voice system in Early Middle Japanese with the Spanish middle voice system (reflexive construction), we can observe that both languages have extended the grammatical voice construction from the spontaneous intransitive construction. However while the Spanish middle voice established the agent-defocusing passive which signifies that "the event (is caused to) occurs by someone", the Japanese "rare" established the non-volitional/potential construction, expressing that "the event occurs spontaneously to someone."

研究分野：日本語文法

キーワード：受身・可能・自発　自然発生　ヴォイス　中動態　視点　非情の受身　ラレルの多義性　自動詞

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

古代日本語のラルについては，従来の研究で非情主語の受身の類型が非常に限られていたことが明らかにされてきた。古代日本語には，「花瓶に桜の花が活けられている」のような結果状態を捉える状態受身は存在したものの，「食料が配られた，条約がむすばれた」などの事態実現の局面を捉える非情主語の受身が存在しなかったとされる。こうした事態実現型の非情主語の受身は，明治以降に欧文翻訳の影響で日本語に広まったものと考えられる。そして，現代日本語ではこの種の非情主語受身文は完全に自然な日本語として定着している。

しかし，なぜそもそも江戸以前の日本語に事態実現型の受身が存在しなかったのか，また，それがなぜ明治以降，急速にラル文の一用法として定着したのか，という点については議論されて来なかった。

２．研究の目的

本研究は，古代日本語のラルに事態実現型の非情主語受身文が存在しなかったのは，西欧諸言語がこの受身文を発達させた領域に，日本語のラルは自発・可能構文を確立したからであるという議論を，スペイン語との対照及び構文のネットワークという方法論で説明することを目的とする。

３．研究の方法

本研究はラルが持つ１つ１つの用法をラルの下位構文と考え，その用法の広がりを構文のネットワーク（横の体系）として捉えた。また，スペイン語の再帰動詞による中動態（middle voice）の体系も同じように各用法を下位構文と考え，ネットワークとして捉えることで，ラルの体系と対照した。

日本語のラル文については，受身，可能，自発，尊敬の用法が古くから指摘されているが，受身については有情主語の受身が中心的なタイプで，非情主語の受身は，「窓際に花が飾られている」のような状態受身，「大臣の勢いは圧されけり」のように，背後に影響を受ける有情者がいる潜在的受影者のいる受身及び擬人化の用法が指摘されてきた。また，可能については，潜在系の可能は中古には存在せず，すべて個別一回的な実現系可能であり，しかも動作主を取り巻く状況によって当該事態が実現しない（する）ことを述べる状況可能のタイプであると考えられる。また，自発については，現代語のように心理動詞に限られず，広く動作動詞にも用いられたことが知られる。

一方，スペイン語の中動態の用法としては，再帰・相互，自動詞化，受身，非人称といった用法が古くから指摘され，かつこの順番に歴史的に派生したことが知られている。さらに，スペイン語の中動態においても，ある種の構文が可能の意味を帯びることが指摘されてきた。

このように，ヴォイス体系で自然発生的自動詞から同じように受身や可能といった構文を拡張させている両言語であるが，その内実はじつは重ならないようである。本研究は，テンス・アスペクト的特徴，実現を左右する条件の特徴，主語の特徴，動作主の特徴等を構文の要素とみなし，これら１つ１つの要素間の関係の組織ないし秩序が構文であるという理論的見方で構文を観察することで，両言語の共通点と相違点をあぶりだした。

４．研究成果

スペイン語の中動態と日本語のラル構文は，どちらも自然発生的自動詞構文から動作主がいなければ起こり得ない事態を表す動詞にまで用法（構文）を拡張させた点では共通している。つまり，本来他動的な事態を自動詞的に捉える構文を拡張させた点では共通している。違いは，日本語では有情者（人間）に視点を置いて，その有情者の側から「有情者に対して事態が自然発生する（変化が実現する）」という意味の構文を発達させたのに対し，スペイン語では「有情者によって事態が実現する」という非情主語の受身構文を発達させた，ということである。

① 日本語のラル構文

日本語では，有情者の側から「有情者に対して事態が自然発生する（変化が実現する）」と述べる構文が，「自分に意志がないのに何らかの要因によって行為が実現する」という自発構文，「通常なら自然に起こるのに何らかの要因によって行為が実現しない」という実現系不可能構文，「自分に意志がないのに他者による行為が自分に対して実現する」と述べる有情主語の受身構文を確立した。

なお，古代日本語の非情主語の受身として状態受身が成立し得たのは，この受身が先行する変化への意識が薄い結果状態を表す「タリ」を下接し，動作主を完全に背景化することができたため，視点を置く有情者が存在せず，視点的に中立な構文として解釈できたためと考えられる。また，「岩にせかるる滝川」のように，行為者も非情物である非情主語受身文は，アスペクト的に，より作用性が感じられ，タリが下接しないこともある。これは，こうした受身文におけるニ格の非情行為者が，「雨に濡れる，風にゆれる」のような自動詞文のニ格と連続的な原因ニ格であるためと考えられる。ここでは，有情者が関与しないことが明らかであるため，視点的に中立な自動詞構文相当として機能し得たと考えられる。

② スペイン語の中動態の下位構文

スペイン語の中動態で構文が安定的に可能の意味を帯びるのは，主に英語で「中間構文 middle construction」と呼ばれ，スペイン語では「中間受身構文 medio-pasivo」と呼ばれる

場合である。中間受身構文は，「Este tejido **se corta** con mucha facilidad.（この布は簡単に切れる）」のような文で，主語が特定名詞で主題化され（動詞に前置し），超時（未完了）の時制で，かつ難易性を表す副詞がかなり義務的に必要であると言われる。この中間受身構文が可能の意味を帯びる理由については，従来妥当な説明は与えられてこなかった上，こうした問い自体が立てられてこなかった。これに対し，本研究は，この中間受身構文が可能の意味を持つのは，尾上（1998）が定義する可能の意味にぴったり合致するからだと主張した（志波・投稿中）。さらに，非人称構文や能格構文（自然発生的自動詞構文），自動詞化受身構文（非情主語受身構文）などで，どのような条件の元で可能の意味を帯びるかを明らかにした（志波・投稿中）

③ 両言語のヴォイス体系の対照

ここで，「動作主の想定」と「対象が非情物か有情者か」という観点から，スペイン語の中動態と日本語のラル構文の体系を対照してみると以下のようになる（研究論文②参照）。

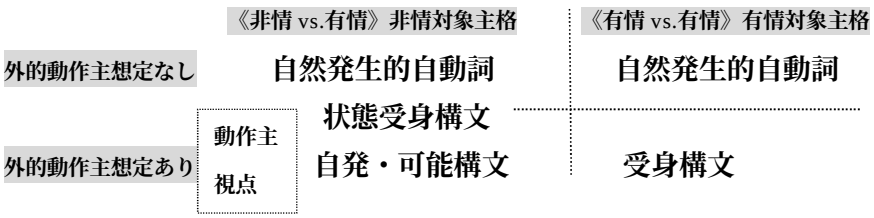

図 1.　日本語のラル構文と自然発生的自動詞

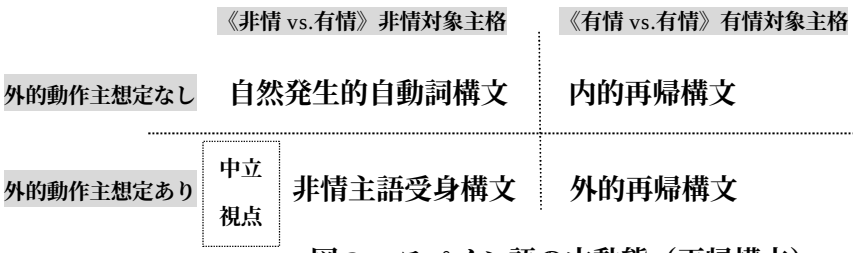

図 2.　スペイン語の中動態（再帰構文）

④ 非情主語受身が近代以降急速にラル構文に定着した理由

上に見るように，自発・可能構文と非情主語受身構文は基本的に対象が非情物であるという点で共通し，ヴォイス体系における１つの領域内で競合するものと考えられる。ラル構文は，中古においては自発・可能構文の割合が非常に高く，現代語では用いられない動作動詞や自動詞による自発構文も存在した。その後，可能構文が特に肯定可能において用法を拡大し（吉田 2013），自発構文は次第に一部の心理（思考・感情）動詞へと使用が限られていった。さらに「可能」の意味が１つの用法としての地位を確立し，意味として十分に定着することに伴い，近世後期には四段動詞において新たな可能の接尾辞「-e-」が発生した。こうして，可能構文は次第にラル構文から可能動詞へと移行しつつあったと考えられる。ここに近代に入り，非情主語受身構文が参入し，急速にラル構文から可能を追い出していったと考えられる。なお，可能動詞への移行は「ら抜き」と呼ばれる現象で，現在も一段動詞において進行中である。ラレル構文は今後ますます受身専用の構文へと変化していくものと考えられる。

【引用文献】

尾上圭介（1998）「文法を考える 6 出来文（2）」『日本語学』17-10: 90-97.

吉田永弘（2013）「「る・らる」における肯定可能の展開」『日本語の研究』9-4: 18-32.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　３件）

① 志波彩子，受身，可能とその周辺構文によるヴォイス体系の対照言語学的考察，査読有，投

稿中
② 志波彩子，近代日本語における依存構文の発達―構文はどのように発生・発達・定着するのか―，国立国語研究所論集，査読有，16 巻，2018，51-76
③ 志波彩子，ラル構文によるヴォイス体系―非情の受身の類型が限られていた理由をめぐって―，バリエーションの中の日本語史，査読無（招待），2018，175-195
④ 志波彩子，受身と可能の交渉，名古屋大学人文学研究論集，査読無，1 巻，2018，305-323

〔学会発表〕（計３件）
① 志波彩子，「スペイン語の se 中動態における可能の意味」日本イスパニヤ学会第 64 回大会，南山大学，2018 年 10 月 13 日
② 志波彩子，「知覚動詞『見える』の構文ネットワーク：知覚・思考・存在・様態・比喩・推定・仮想」日本語文法学会第 17 大会，パネルセッション（構文と意味の拡がり），神戸学院大学，2016 年 12 月 11 日
③ 志波彩子，「近代日本語における依存構文の発達：間接疑問構文の客観化を契機として」日本言語学会第 125 回大会口頭発表，慶應義塾大学，2016 年 6 月 25 日

〔図書〕（計　０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者（連携研究者）
研究協力者氏名：青木博史
ローマ字氏名：Aoki Hirofumi
研究協力者氏名：岡部嘉幸
ローマ字氏名：Okabe Yoshiyuki

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。